

縄文時代から弥生時代への転換期における 「住み分け」をめぐる議論について

宮地聰一郎

要 旨

近畿地方の縄文時代から弥生時代への転換期における議論の一つに、刻目突帯文土器を使用する集団と遠賀川式土器を使用する集団との「住み分け」があったか否かといったものがある。この議論は同じ資料を対象にしても、縄文時代から弥生時代への変化及び遠賀川式土器圏の成立についての個々の研究者が持つ歴史観によって解釈が大きく異なる。

戦後、縄文時代から弥生時代への変化に、縄文時代の在来の人々の役割や重要性に焦点があてられるようになった一方で、弥生文化が大陸に起源を持ち、それら新しい文化が東遷する点を重視する考え方も存在し続けた。もちろん、それらは二者択一で考えるべきものではないが、その考え方の一端がこの住み分けをめぐる議論には表れている。ただ、1980年代後半から1990年代に呼ばれた「大変革の主体は縄文人だった」というパラダイム転換の中では、以前のような住み分けの想定には矛盾が生じていたはずだが、その点を自覚した研究者は意外と少なかったのではなかろうか。

現況の資料からは、刻目突帯文土器と遠賀川式土器の併存関係、ひいては住み分けの関係が長期間に及ぶことはうかがえず、基本的に両者は、時間的に前後の関係として捉えるべきものと考えられる。遠賀川式土器製作者の西方からの人の移動を重視しながらも住み分け現象を評価しないという、これまであまり想定してこなかった捉え方も成り立つと考えたい。

キーワード：刻目突帯文土器、遠賀川式土器、住み分け、文化伝播論、文化変容論

はじめに

近畿地方の縄文時代から弥生時代への転換期における議論の一つに、刻目突帯文土器を使用する集団と遠賀川式土器を使用する集団との「住み分け」があったか否かといったものがある。この議論は、同じ遺跡・遺物を対象とするにもかかわらず、研究者によって結論が異なる点が興味深く、その要因として、研究者それぞれの方法論や歴史観が大きく関わることが考えられる。

以前と比べれば、資料の増加によって議論は収斂しつつあるが、この問題は土器の一括資料や型式の認識といった方法論の課題に留まらず、縄文時代から弥生時代への変化についての歴史的評価に関わる重要なものである。

本稿ではこの議論について、なぜこれまで議論が続いているのかを整理するとともに、1980年代後半から1990年代に起こったと考えられる縄文時代から弥生時代への変化をめぐる研究のパラダイム転換の中で、住み分けの想定に矛盾が生じていたことを指摘し、今後の議論の進展への基盤を整備したい。

1. 「住み分け」をめぐる議論の概要

住み分けをめぐる議論は、遠賀川式土器がどのように波及したかを探求する過程で繰り広げられた。特に遠賀川式土器の波及に人の移動を考え、それまで縄文土器を使用していた集団とどのような関係を取り結んだかといった視点でこの問題を取り上げた論考が多い。例えば中井一夫氏は、西日本各地で弥生時代前期の古い段階の遺跡の周辺に縄文時代の遺跡がない地域と、やや遅れて遠賀川式土器が出現し縄文時代の遺跡と重複もしくは近接する地域があることに注目した。その背景として、初期弥生集落の立地は縄文集落によって規制されていたこと、そして前者の地域から後者の地域に弥生文化が伝播したことを想定し、「縄文社会の領域外へ弥生人が他地域から移住してきたと考え」(中井 1975: 97頁)、住み分けが行われたと理解した。

後に住み分けを巡る議論が白熱したのは河内潟沿岸の地域である。この地域への遠賀川式土器の波及については佐原真氏が、「紀元前二〇〇年前後のことである。幾艘かの舟が瀬戸内海を通って、蘆のおいしげる難波江にはいってきた。舟からおりたった、背の高い人々については、すでに前章で紹介すみである。彼らこそ、

米作りと金属・紡織をはじめとする新技術をもたらしたバイオニアであった。それまでは、狩人たちが水鳥を追って時たまあらわれるにすぎなかった水辺や湿地の近くで、彼らは大地を耕しあげた。」(佐原 1970 : 24 頁) とその情景を描いたうえで、この背の高い人々の用いた土器が遠賀川式土器であり、それが九州北部の土器とよく似ていることから、九州北部で成立した弥生文化が比較的短期間に近畿地方にまで到達したことを説明した。

以上のような想定を考古資料で具体的に示したのが中西靖人氏である。中西氏は、遠賀川式土器が主体で刻目突帯文土器が少量共伴する河内平野中央部の遺跡と、刻目突帯文土器が主体で遠賀川式土器が少量共伴する羽曳野丘陵周辺等の遺跡と大きく二つに分け、前者について、「集団で移住し、周辺の縄文人の集落へ新しい文化を伝えた集落だったのではなかろうか」(中西 1984 : 126 頁) と考え、遺跡分布図も示したこと、住み分けの実態を明確に示した(図 1) (中西 : 1984, 1992, 1995)。

その後、刻目突帯文土器の長原式や遠賀川式土器が出土する遺跡の発掘調査事例が増加してくると、それぞれが主体をなす遺跡が近接して存在する状況が明らかになっていった。秋山浩三氏はこの状況から、中西氏のように領域を分けて集落を営む「住み分け」ではなく、同じ領域に近接して集落を営む状況を想定し、これを「共生」とした(図 2)¹⁾。そして、遠賀川式土器使用集団が、刻目突帯文土器使用集団と同じ領域内に集落を営むことを許容される状況があったこと、大きな摩擦や衝突がなく、友好的な関係を保持し、そのことがスムーズに本格的な「弥生化」を達成した前提になったと理解した(秋山 1999, 2002a, 2002b, 2002c)²⁾。なお本稿では、秋山氏の「共生」についても、遠賀川式土器と刻目突帯文土器の共時性を前提とした異地点居住を想定していることから、大きく「住み分け」と括り、論を展開する。

以上の見解とは異なり、河内潟沿岸の刻目突帯文土器と遠賀川式土器との併行関係について吟味し、「住み分け」の想定に否定的な意見も 2000 年以降増えてきた。詳細は後述するが、若林邦彦氏は出土状況から、刻目突帯文土器が主体で遠賀川式土器が共伴する遺跡は、長原式とは異なる特徴を持つ水走遺跡のみであることを指摘し(若林 2000a, 2002, 2021)、豆谷和之氏は、その水走遺跡出土土器の型式学的検討から、出土状況が一括性を保証するものではないことを指摘した(豆谷 2008)。また、岡田憲一氏は、周辺地域も含

めた刻目突帯文土器の型式学的検討とそれらの出土状況の検討から、遠賀川式土器と刻目突帯文土器の共時性を基本的には否定し、共時性があるとすれば、長原遺跡 H 地点の長原式よりも時期が下がる水走遺跡等の刻目突帯文土器である可能性を指摘した(岡田 2014)。

以上が議論の概要だが、上記の議論のうち、遠賀川式土器使用集団の系譜が西方にある点については、さほど異論がない。遠賀川式土器の成立地をめぐる議論については、最も古い弥生土器としての板付 I 式を生み出した玄界灘沿岸が重視されつつも、地域差を考慮し、瀬戸内地方も含めた地域で検討されてきた。齊一的と呼ばれる遠賀川式土器も細かく見れば地域性が存在し、文化変容論の視点も有効ではあるが、近畿地方で自立的に成立したものではない点は意見の一致を見ていると言える。また、近畿地方の刻目突帯文土器である長原式と、遠賀川式土器とでは、製作技術に大きな差異が存在することから、遠賀川式土器の出現には多少なりとも人の移動があった点も概ね肯定されていると言える。従って、住み分けをめぐる最も重要な論点は、刻目突帯文土器と遠賀川式土器の併存期間がどの程度あるのか、またその期間をどのように考えるかという点にある。次章では、その併存関係についての議論を整理しておきたい。

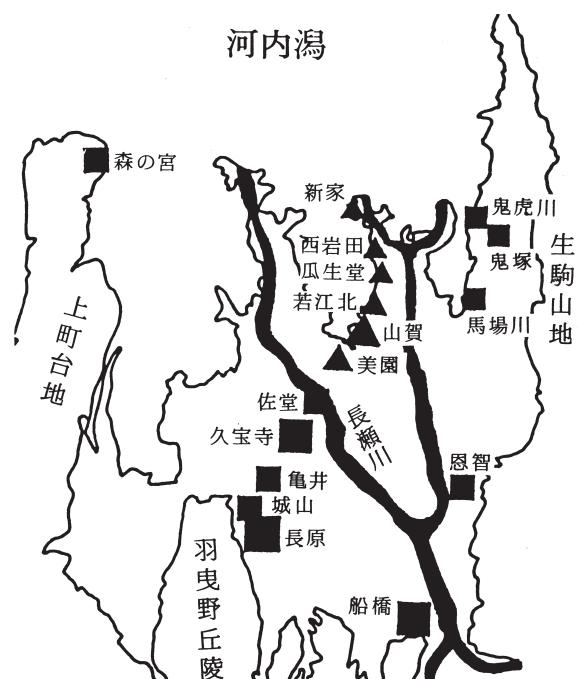


図 1 中西氏の住み分けの想定 (中西 1984)
▲ : 遠賀川式土器主体 ■ : 刻目突帯文土器主体

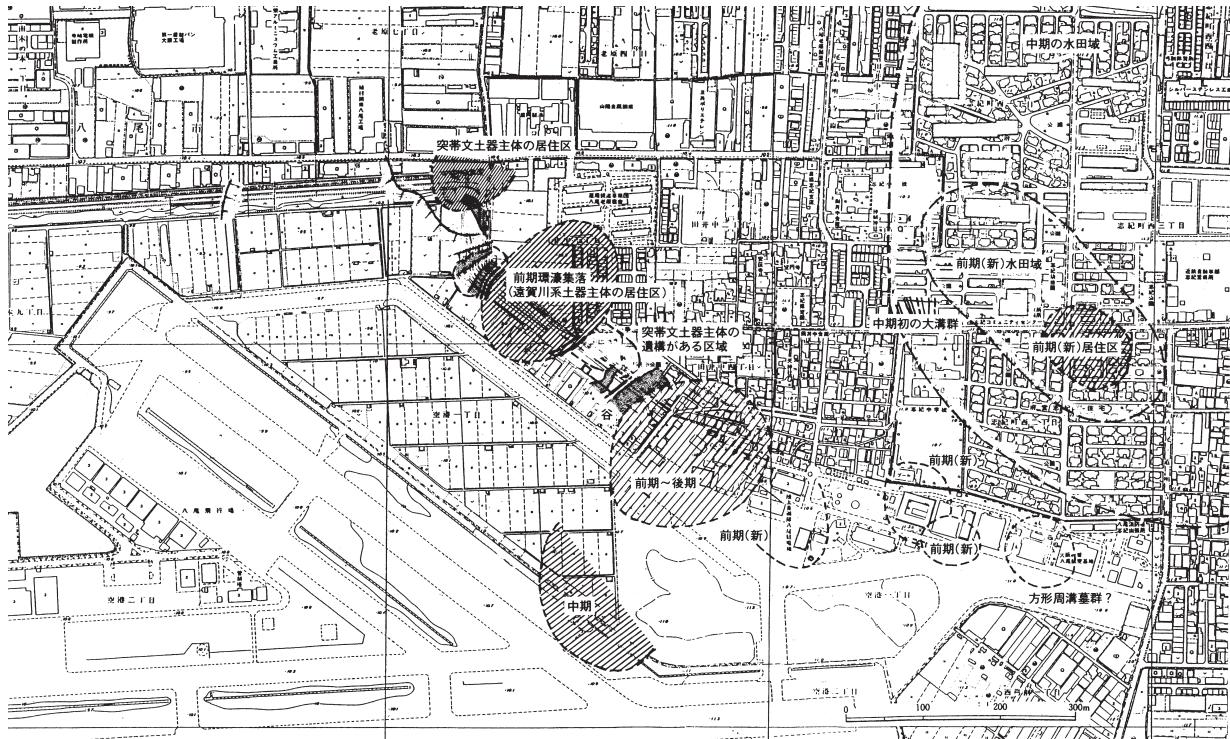


図2 秋山氏の田井中遺跡における共生の想定（大阪府教育委員会 1998）

2. 刻目突堤文土器と遠賀川式土器との併存をめぐる議論

（1）出土状況からの検討

このことについて、中西氏以来注目されてきたのが、遺跡での刻目突帯文土器と遠賀川式土器の出土状況である。中西氏は、多くの遺跡で刻目突帯文土器と遠賀川式土器が一緒に出土すること、またその量比が、刻目突帯文土器がほとんどでわずかに遠賀川式土器が出土する遺跡と、遠賀川式土器がほとんどでわずかに刻目突帯文土器が出土する遺跡とに分かれる点を重視した。そして、この系統の異なる土器がわずかに出土する現象について、異なる集団同士が土器を受け渡した結果と理解することで、両集団が同時期に存在したことを想定した。

だが、この「一緒に出土する」状況は、ほとんどの場合、遺物包含層からの出土であり、一括性を保証するものではない。若林邦彦氏は河内潟沿岸の遺跡での出土状況を整理し、遠賀川式土器主体の遺跡で刻目突帯文土器の共伴例はいくつか存在するが、刻目突帯文土器主体の遺跡で初期遠賀川式土器が共伴する例は水走遺跡のみだと指摘した。しかも水走遺跡の刻目突帯文土器は、純粋な長原式ではないことから、初期遠賀川式土器期の刻目突帯文土器主体集落は極めて希少であり、刻目突帯文土器と遠賀川式土器は基本的には時間的先後関係にあったと理解した（若林 2000a、2002、

2021：147頁）。

若林氏が共伴例として挙げた水走遺跡（東大阪市教委ほか 1998）については、豆谷和之氏が型式学的検討を加味し、出土した遠賀川式土器が近畿地方最古のものではないこと、また水走遺跡の刻目突帯文土器は長原式の一部変異であり、型式として設定できる内容ではないことから、一括性は低いと考えた（豆谷 2008）。

以上のように、刻目突帯文土器と遠賀川式土器が共伴する良好な一括資料が乏しい中、埋設状態で両者が組み合う事例がないわけではない。やや離れるが例えば兵庫県の新方遺跡では、遠賀川式の鉢と刻目突帯文土器の深鉢が重なり合って出土している（神戸市教委2003）。これは両者の共時性が担保できるものではあるが、このような事例は普遍的に存在するわけではなく、土器型式が入れ替わる一時的な現象とも解釈できる。ごく僅かな共伴例をもって両型式の存続期間が大きく重なるとは即断できない。

また、刻目突帯文土器と遠賀川式土器が一つの遺跡で一緒に出土するにしても、刻目突帯文土器及び遠賀川式土器それぞれを主体とする遺跡の形成過程は、前者から後者への移動の結果と考えることも可能である。この点、高松龍暉氏・矢野健一氏が縄文時代の集落動態を分析する際に指摘した、「集落が移動するためには遺跡どうしの間に移動するための時間が共有される必要がある。つまり、同じ土器型式が両方の遺跡で出

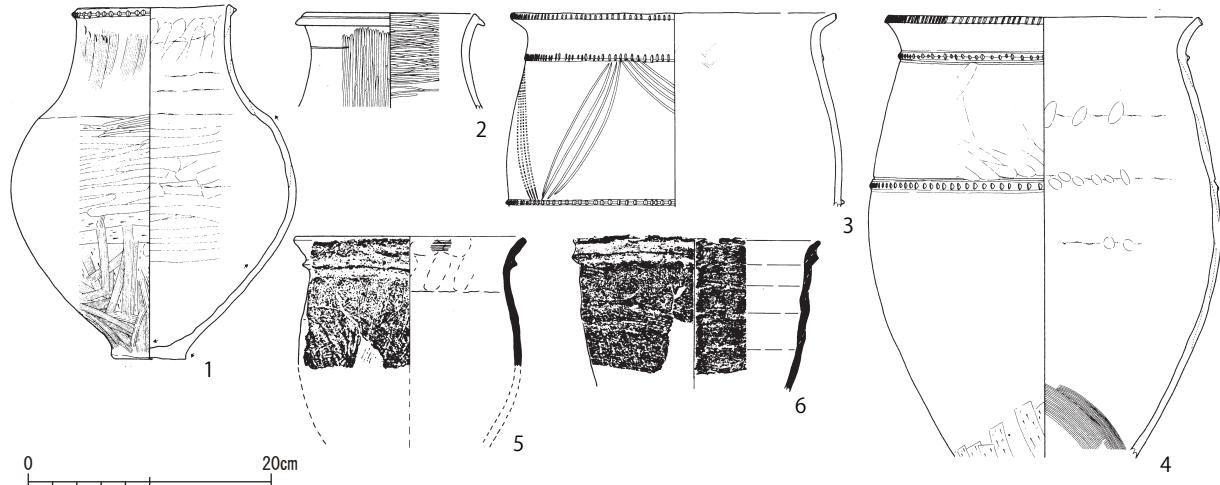


図3 折衷土器と理解された土器

(1~4: 若江北遺跡: 大阪府文化財調査研究センター1996、5・6: 水走遺跡: 東大阪市教育委員会ほか1998)

土していなければならぬのはずである」(高松・矢野 1997: 84 頁)との視点は重要である。

以上のように、出土状況一つ取ってみても、共時性の解釈は様々なのである³⁾。

(2) 折衷土器からの検討

また、刻目突帯文土器と遠賀川式土器の共時性を物語るものとして、折衷土器の存在も挙げられている(図3)。秋山氏は、若江北遺跡(大阪府センター1996)から出土したハケ調整を持つ縄文系の壺(図3-1)や2条突帯の形状に似る甕(図3-3・4)、また水走遺跡の外反する刻目突帯文土器の深鉢(図3-5・6)を例にあげ⁴⁾、これらを刻目突帯文土器と遠賀川式土器との折衷土器とし、両者の共時性の傍証とした(秋山 1999)。その他、三好孝一氏が刻目突帯文土器の影響を受けた弥生土器と解釈した図3-2の壺もこの類に含まれよう(三好 1996)。だが、秋山氏も指摘するように、これらは刻目突帯文土器から遠賀川式土器への変化の過程でも生まれ得るものである。

秋山氏が共時性を考える理由は、水走遺跡での刻目突帯文土器と遠賀川式土器の出土状況がある。水走遺跡では同一貝塚でも3つの地点で土器様相が異なることから、貝塚が形成される短い時間幅の中で、遠賀川式土器の比率が増加していく、刻目突帯文土器と遠賀川式土器とが影響しあう環境が形成されたと考えた。そしてこのことが、刻目突帯文土器から遠賀川式土器への全面的な急転換ではなく、両者が一定期間併存したことの証左になるとしている。先の折衷土器は、3つの地点のうち最も新しい地点から出土しており、このこともおそらく考慮したことだろう。

しかし、水走遺跡の出土状況は、先述の豆谷氏の指摘のように、地点別にそれぞれを良好な一括資料とみなすには慎重さが求められる。また秋山氏が折衷土器とする土器は、若江北遺跡や水走遺跡では存在するとしても、その他多くの遺跡では確認できない点は、刻目突帯文土器と遠賀川式土器が影響しあう環境が極めて希であったことを示している

これに関連して、縄文土器によく使用される生駒山西麓産の胎土が遠賀川式土器に使用される現象についても触れておきたい。秋山氏は河内潟沿岸の最古級の遠賀川式土器がまとまって確認された若江北遺跡の土器の多くが、長原式によく使用される生駒山西麓産の胎土であることから、刻目突帯文土器使用集団との密接な交流や結びつきが存在したことを想定する。併存する立場からはそのような解釈になるが、これも併存を立証することにはならない。

例えば、生駒山西麓産の胎土を使用していた刻目突帯文土器使用集団が、沿岸部への移住を機に遠賀川式土器を伝統的な胎土で製作するようになったと考え、これを前後の関係で捉える考えも当然成り立つのである(若林 2000b)。

以上のように、出土状況や折衷土器と言われる土器の分析でも、現在のところ刻目突帯文土器と遠賀川式土器の併存を明確に証明も否定もできる状況にはない。折衷土器と言われる土器については、同時存在とも考えられるし、土器型式が変化する段階の過渡期の現象とも考えられる。この折衷土器・過渡期の土器をめぐる解釈の違いは、土器研究の議論ではしばしば見受けられ、例えば縄文時代後期の平城式を巡る議論等は好例である(千葉 2008: 51 頁)

また、折衷土器が少ない点についても、時期差が存在したためと考える以外に、両者が没交渉の関係であったためと考えることもできよう。

これらの解釈を左右するものは、研究者各々の土器の変遷観等が大きく関係している⁵⁾。特に縄文時代から弥生時代への変化は、学史的に見ても研究者個々の解釈の仕方のみならず歴史観の差異が顕著である。

3. 「住み分け」をめぐる歴史観の学史的整理

(1) 文化伝播論と文化変容論

住み分けの想定は、遠賀川式土器を使用した集団と刻目突帯文土器を使用した集団とは異なった集団であること、また遠賀川式土器を使用した集団の系譜が西方にあり、近畿地方には人の移動があったとの前提がある。後者は小林行雄氏による遠賀川式土器伝播の構図が基本となり（小林 1932）、これが引き継がれたものである。

小林氏は、弥生文化を大陸から渡って来た人々がもたらしたものと考え、遠賀川式土器にその文化運搬者としての役割を見出し、西日本に素早く農耕文化が浸透していった様を見出した（小林 1938）。小林氏の当時の見解として興味深いのは、縄文文化と弥生文化が時期的に重なる期間を想定していたことであり、縄文時代晚期に合口甕棺（埋設土器）や石刀、石冠が出現する背景として、弥生文化からの影響があったことを考えた（小林・藤岡・中村 1938）。

戦後は、山内清男氏が唱えていた、縄文時代の終末時期が地方によって大差がないとする学説が主流を占めるようになり、縄文文化から弥生文化への内的变化を重視する研究が増えていった。山内氏は、「刺激は外から受けたにしても、弥生式の母体は縄文式にあるとの考証を持ち、又文化変容の現象をそこに見ようと考え」、刻目突帯文土器の分布圏のうちに遠賀川式土器が見られるようになる点に注目した（山内 1952：123 頁）。この遠賀川式土器圏形成の下地として刻目突帯文土器圏を評価する見解は、例えば鎌木義昌氏の「北九州にはじまった弥生文化が、かなり短期間に東海地方の一部にまで伝播したのは、この東海地方の一部から北九州にかけての地帯に、伝播しやすい要素が存在したことをしめしており、凸帯文土器という共通の土器によってむすばれた文化が、あらゆる生活面で一つの文化圏をつくっていたことを意味している」（鎌木 1965：26 頁）といった理解に代表され、当時一般的になったと見て良い。

これに対して、先述した中井氏は、遠賀川式土器圏

形成の背景として、九州北部から人の移動を重視したものである。遠賀川式土器圏が広範囲にしかも短期間に形成される要因として、前段階の刻目突帯文土器圏の存在と役割を重視するのが「文化変容論」、九州北部で遠賀川式土器が成立し、それが東方への移動を伴って伝播した点を重視するのが「文化伝播論」と整理できるが、住み分け現象は文化伝播論の上に立つことは言うまでもない。

戦後は、小林氏も弥生土器の中に縄文土器の要素が含まれることに言及するようになったが（小林 1951：130 頁）、縄文文化から弥生文化へ変化するきっかけとしての大陸文化の流入に意義を求めるだけ、国内の遠賀川式土器分布圏形成については、終始、文化伝播論で解釈し続けたと言える。これが可能だったのは、豆谷和之氏が指摘したように、文化伝播論の考え方方が文化変容論を吸収したためであろう（豆谷 1995：49 頁）。それは、刻目突帯文土器圏の弥生文化に移行しやすい性格を考慮しながらも、遠賀川式土器が波及する要因としては、人の移動に重きを置くものであり、遠賀川式土器の波及後は、刻目突帯文土器使用集団はすみやかに弥生文化に移行したという理解の枠組みが主流になっていたと言える。もはや純粹な文化伝播論ではなく、浜田晋介氏は、小林氏が弥生文化の中に縄文文化の要素を認め、また山内氏が大陸からの人の移住に言及して以降は（山内 1964：144～145 頁）、明確な形として文化変容論と文化伝播論の対立は解消したと指摘する（浜田 2018：138 頁）。ただ、遠賀川式土器圏成立の要因として、刻目突帯文土器圏の性格をより重視するのか、または遠賀川式土器の人の移動を伴った波及をより重視するのかは、程度の差はあれ研究者によって異なり、現在においても議論は続いている。これが「住み分け」をめぐる議論にも影響を及ぼしているのである。

(2) 在来の人々をめぐって

注意が必要なのは、中西氏も含め、多くの研究者が、住み分け後に弥生文化を展開させていたのは縄文時代以来の人々と考え、移住者のもたらした遠賀川式土器に転換していく姿も同時に示している点である。田中清美氏は、遠賀川式土器が主体を占める若江北遺跡や田井中遺跡の土器に生駒山西麓産の胎土が多く用いられている点に注目して、在来の集団が遠賀川式土器の器形や製作技術を受け継いだと解釈し、また若江北遺跡で掘立柱建物を主体とする集落から竪穴住居を主体とする集落へ移行した背景に、在来の人々の関与を

想定する（田中 2000：896 頁）。これらの考え方は、近畿地方の遠賀川式土器に、木葉文など近畿地方の縄文時代晩期の土器文様が見られる点から、新たな異邦人が近畿地方にやって来たことを評価しながらも、近畿地方の弥生文化に縄文時代の伝統が見られる点を重視することに起因する（坪井 1970）。これは先に整理したように、人の移動を重視しながらも文化変容論の考え方を併せ持つものであり、この枠組みでは本来、一時的に住み分けが見られたとしてもその状況が長く続くとは考えにくい。豆谷氏が住み分けをほとんど想定しなかったのは、このような学史を踏まえ、文化変容論の立場に立っていたためである。

（3）刻目突帯文土器期の稻作の評価と住み分け論

住み分け等をめぐる議論は、研究者の歴史観等によって解釈に差が生じることを確認したが、その歴史観は、「弥生時代早期」の設定以降、1980 年代後半から 1990 年代に大きな変化があったと筆者は考える。それは近畿地方も含め、西日本一帯で刻目突帯文土器期に稻作が行われた証拠が次々に挙げられ、遠賀川式土器以前の稻作の展開についての議論が活発になっていったことが関係している。この弥生時代早期の九州北部からの水稻耕作を伴った文化の影響について筆者は、過大評価は慎むべきと考えているが、当時は西日本一帯で「弥生時代早期」を適用するかといった議論まで起こり、縄文時代から弥生時代への変化について、以前よりも漸移的に捉える風潮が高まっていた。このことも関係し、弥生文化の成立について、「大変革の主体は縄文人だった」というパラダイム転換が叫ばれたのである（金関ほか 1995）。

住み分けの議論は当初、伝統的な文化を保持する刻目突帯文土器使用集団と、新しい水稻耕作を伴った文化を保持する遠賀川式土器使用集団を想定したものであったため、上記の動向はその前提が揺らぐことになる。この点で、泉拓良氏は、「突帯文土器期の水田耕作もしくは稻作が認められたにもかかわらず、遠賀川式土器の東進については、遠賀川式土器の波及イコール人種の交代という従来の見解に変化がみられないものである」（泉 1990：197 頁）とその矛盾を指摘し、「遠賀川式土器の東進の論理が、かつてのように水田耕作という高度な技術体系をもった人々の移住という論理をもつならば、また、それに基づく人々の住分け論を展開するならば、稻作突帯文土器文化の評価を明確にしなければならないであろう。」（同：同頁）と、一貫性を持った歴史観で捉える必要性を訴えた⁶⁾。

その後も住み分けを想定する考え方は継承されたわけだが、上記動向もあり、その内容に変異が見られるようになった。例えば森岡秀人氏は、近畿地方における弥生時代のはじまりについて、刻目突帯文土器期における水稻耕作の豊かな情報があつたために、発展的友好的に速やかに本格的な農耕社会がスタートしたと理解しつつも、遠賀川式土器出現期の刻目突帯文土器使用集団の対応が、極めて多様であったと考えた。森岡氏は、船橋式以降の刻目突帯文土器使用集団の中に、水稻耕作を模索する集団も生まれたことを想定し、長原式には、弥生化を志向し集落の移動を契機に遠賀川式土器を製作しはじめた集団が存在したことを想定する一方、河内潟沿岸に集住した領域に遠賀川式土器使用集団が侵犯する形で侵入したことで、人口飽和を余儀なくされた刻目突帯文土器使用集団が遠隔地にも移動したことも考えた（森岡 1993・1995）。

また、先に俎上にあげた秋山氏の一連の研究も、遠賀川式土器使用集団の由来に、在来の刻目突帯文土器使用集団を考えていることから、刻目突帯文土器使用集団の中で、いち早く遠賀川式土器使用集団に転換した集団とそうでなかった集団が存在したことを想定していると思われる。だが、これらはあくまで遠賀川式土器と刻目突帯文土器とが併存するとされる時期の多様な状況を説明するための仮説と言え、そのことを考古学的に論証することは困難を極める。

以上のように、刻目突帯文土器期の稻作が評価されるようになって以降、純粹な住み分け論は矛盾を抱えるようになっていた。それでも遠賀川式土器出現期における刻目突帯文土器使用集団の動向を多様に考え、旧来の伝統的な文化を保持しつづける集団が存在したことを仮定することで、住み分けの想定は成り立っているのである。

4. 住み分け論の現在

（1）住み分け関係が意味するもの

これまで述べてきたように、在来の刻目突帯文土器使用集団が遠賀川式土器に転換するとしても、住み分け現象が成立するには、刻目突帯文土器と遠賀川式土器とが一定期間併存することが前提になる。そして、その期間をどの程度考えるかによって異なるものの、住み分けを評価することは、一定期間、遠賀川式土器に転換しなかった刻目突帯文土器使用集団が存在したことを想定することになり、その背景には多少なりとも遠賀川式土器への転換に抵抗や文化摩擦があったことを意味する。

つまり住み分けには、遠賀川式土器使用集団の系譜が西方にあり、人の移動によってもたらされたこと、そして土器編年上、遠賀川式土器と刻目突帯文土器が一定期間併存したことが前提となり、その歴史的評価としては、一定期間は遠賀川式土器への転換が進まなかつたことを意味する、とまとめることができよう。

刻目突帯文土器期の稻作の経験等が、後の遠賀川式土器出現期における文化摩擦を生じさせなかつた要因と考えることは確かに興味深い。先に触れたように、秋山氏は在来者集団の領域の一角に遠賀川式土器使用集団の居住が許された関係を想定し、遠賀川式土器使用集団にも土偶や石棒が存在する背景として、両系集団間で密接な交流や友好性が人的・社会(集団)的に達成されていた(秋山 2002c: 66 頁)と考え、「『共生』期間を経験しつつ、大きな摩擦や衝突がなく極めて速やかに近畿『弥生化』が達成された」(同: 同頁)とする。だが、そのような集団の関係性が構築されたのであれば、なぜ両集団の土器が異なるのか。両集団での交流が存在したのであれば、両集団の主体的な土器相は異なるにせよ、その構成比は極端に偏らず、折衷土器も多く存在することが想定されるが、実際はそうではない。両集団の土器相が異なり、その関係が比較的長期間に及ぶと想定するのであれば、それは寧ろ両集団間で文化摩擦が存在したと評価すべきであろう。

(2) 遠賀川式土器使用集団への転換

先に触れた、刻目突帯文土器使用集団の中でもいち早く遠賀川式土器使用集団に転換した集団を想定することについても触れておきたい。この点に関して、縄文時代の地域社会の特質を踏まえた林謙作氏の指摘は傾聴すべきである。林氏は、「集団労働や祭儀を媒介とする地域・村落の結び付きの網の目が細かに張りめぐらされていた」状況から、「ひとつのムラあるいは村落が稻作に転換しようとすれば、伝統的な結び付きをたもっていた他の村落やムラの了解が必要になる」(林 1986: 119 頁)とし、弥生時代への転換は「個々のムラを単位としてなしくずしに起こったものではなく、ある地域的なまとまりを単位として一齊に行われたことを」想定した(同: 118~119 頁)。近畿地方の長原式の地域社会については、先学も触れた生駒山西麓産の胎土も重要だが、上峯篤史氏が明らかにしたように、石器石材の流通・製作に関して遺跡間の連鎖関係が形成されていた点は重要である(上峯 2012)。以上のような地域の中での集団間の結び付きを想定した場合、刻目突帯文土器を使用していた集団の個別の対

応は考えにくく、そのような現象が存在したのであれば、森岡氏の指摘するように、集落間に広がっていた交流の紐帶は断ち切られたと理解すべきであろう(森岡 1993)。そのような状態が長期間継続するとは想定しにくく、刻目突帯文土器使用集団は急速に解体への道を進んだと考えざるを得ない⁷⁾。

実際、刻目突帯文土器の最終段階と目される水走タイプの土器が出土する遺跡は少なく、分布域の縮小からも刻目突帯文土器使用集団の終焉がうかがえる(妹尾 2014)。この段階と遠賀川式土器が出現する段階がある程度重なるとしても、以前考えられていたような住み分けの関係が長期間存続したとは想定しにくい。したがって遠賀川式土器使用集団への転換は概ね一齊に行われたと理解しやすい状況にあり、その中で世代交代の期間等、刻目突帯文土器のわずかな残存現象はあってしかるべきと考えたい。このような、集団の移動を伴った系譜の異なる土器への転換という現象は、縄文時代においても弥生時代においても頻繁に生じており、この時期だけを別格視する必要はないとの指摘もある(矢野 2008、2016: 25 頁)。刻目突帯文土器と遠賀川式土器の併存に意味を見出すのであれば、この縄文時代から弥生時代への転換を別格視することになるが、この場合、特に集団差について、歴史的意義付けを行うということになろう。

(3) 遠賀川式土器圏成立背景の歴史的評価

先に学史で触れたように、遠賀川式土器圏の形成について、その範囲が刻目突帯文土器圏とほぼ重なる点を重視する文化変容論と、遠賀川式土器の人の移動を伴った伝播を重視する文化伝播論に整理されるが、両者は融合しつつも研究者によってその比重のかけ方に差があると言える。実際その融合の仕方は複雑ではあるが、住み分けは文化伝播論との相性が良く、逆に文化変容論とはそぐわない。それを踏まえれば、弥生時代早期が設定されて以降、刻目突帯文土器期の水稻耕作が評価され、縄文時代から弥生時代への変化に縄文時代の在来の人々の主体性を唱える風潮が高まっていった中では、住み分けの現象は、本来であればその存立基盤が揺らいだはずなのだが、その点を自覚した研究者は意外と少なかったのではないだろうか。

先に触れたように、住み分けを評価する考え方が継承し得たのは、文化伝播論が文化変容論を融合させたからだと言える。具体的には、在来の人々が新しい文化を担う集団へ転化していったことを評価しつつも、弥生時代への変化の本質として、外来の移住者が大き

な役割を果たしたことを評価したからであり、この考え方自体は、筆者も異を唱えるわけではない。それは、近畿地方において、刻目突帯文土器から自立的に遠賀川式土器が成立する余地ではなく、製作技法の変化等をふまえるならば、西方からの遠賀川式土器製作者が大きな影響を与えたことは明白だからである。従って、理論的には小南裕一氏や中村豊氏も指摘するように、移住当初に刻目突帯文土器と遠賀川式土器が併存することはあって然るべきである（小南 2012：64 頁、中村 2022：85 頁）。ただ、その併存を特に重視し、その期間を長く考え、集団差を評価することは、遠賀川式土器への転換について、文化的な抵抗や摩擦の存在を歴史的な評価とすることになると考える。また、現況の資料からは、その併存関係、ひいては住み分けの関係が長期間に及ぶことはうかがえず、基本的に両者は、時間的に前後の関係として捉えるべきものと考えられる。つまり、遠賀川式土器製作者の西方からの人の移動を重視しながらも住み分け現象を評価しないという、これまであまり想定してこなかった捉え方も成り立つと考えたい。

おわりに

以上、河内潟沿岸における縄文時代から弥生時代への転換期における住み分けをめぐる論点について整理してみたが、その解釈や歴史的評価は、同じ資料を対象にしても、個々の研究者が持つ、縄文時代から弥生時代への変化についての歴史観に大きく左右されることを確認した。したがって、この問題を考えていくためには、ミネルヴァ論争にまで遡り、歴史観の形成過程の学史を踏まえる必要がある。戦後、縄文時代から弥生時代への変化に、縄文時代の在来の人々の役割や重要性に焦点があてられるようになった一方で、弥生文化が大陸に起源を持ち、それら新しい文化が東遷する点を重視する考え方も存在し続けた。もちろん、それらは二者択一で考えるべきものではないが、その考え方の一端がこの住み分けをめぐる議論には表れている。

今回は、河内潟沿岸を舞台とした状況を垣間見たが、将来、仮に刻目突帯文土器と遠賀川式土器との併存期間の年数が明らかになったとしても、それを短いと捉えるのか長いと捉えるのか、またその解釈や意義付けについての議論は終わることはないだろう。同様の議論は中四国地方でも盛んに行われているが、本稿が今後の議論の一助になれば幸いである。

注

- 1) 「共生」という語をはじめて使用したのは、四国地方の吉野川下流域の事例を分析した中村豊氏である（中村 1998）。中村氏は多量の刻目突帯文土器と少量の遠賀川式土器が共存する三谷遺跡と、ほとんどが遠賀川式土器で構成される庄・蔵本遺跡について、ほぼ同時期でありながらそれぞれの文化内容が好対照を示すことに注目し、その位置関係から両集団は生活圏を共有していたと考え、この短期間に見られる特殊な現象を「共生」とした。秋山氏の「共生」は、吉野川下流域の事例よりも近接する集団にも適用し、かつ比較的長期間にわたる関係を想定している。
- 2) 春成秀爾氏は、河内潟沿岸のような、領域内において近接して異なる集団が集落を営む事例として、石毛直道氏が調査したパプアニューギニアのウギンバ集落の例を参考に挙げて理解しようとする（春成 2007）。これは、モニ族の領域内にダニ族が交易の中継のために移動し居住するようになり、住居及び集落配置を見るとあたかも両族が集落を構成しているように見えるものだが、実態は両族の言語体系が全く異なり、お互いにほとんど交渉を持たないという（石毛 1971：148-152 頁）。
- 3) なお、長原式と遠賀川式土器の年代を炭素 14 年代測定で検討する試みも行われている。だが、それらの炭素年代値は、較正曲線が水平になる所謂 2400 年問題にかかるため、年代の絞り込みは難しい。藤尾慎一郎氏は、測定値が集中する部分を比較し、長原式と遠賀川式がほぼ同じ炭素 14 年代値を示すことから、両者を 100 年程併存したと考えるが（藤尾 2009）、示されたデータは、絞り込みができない年代幅の中に両者の年代があることを示してはいても、それをもって両者の年代が併存するとは言えないはずである。この長原式と遠賀川式との年代値については春成秀爾氏も同じように考え、両者の併存期間をさらに長く 200~250 年にも及ぶと考えた（春成 2007）。これは長原式が弥生時代の前期古・中段階、一部は新段階まで併存することを前提に考え、しかも極めて絞り込みの難しい時期の曆年較正年代幅で検討を行ったことが関係している。春成氏は近畿地方の前期古段階の上限を前 7 世紀前半とするが、参考として挙げた板付 II a 式の年代についても、やはり 2400 年問題にかかるため根拠は薄弱である。
- 4) 水走遺跡の当該土器についてはいち早く、田畠直

彦氏が如意形口縁の影響を受けた可能性を指摘している（田畠 1997）。

- 5) 岡田憲一氏は住み分け論について、弥生時代研究者に支持する見解が多く、縄文時代研究者に否定論者が多い現状は、方法論の問題もあいまって、興味深い事実であると指摘する（岡田 2008:192 頁）。筆者はその一端として、弥生時代研究者と縄文時代研究者の土器型式についての認識の差も関係していると考える。例えば縄文土器研究における山内清男氏の型式の「地方差、年代差を示す年代学的の単位」（山内 1932:41 頁）という認識は、同一地域における異なる土器型式の同時併存という事態を想定しにくい。
- 6) この点、住み分け現象を以前から提唱してきた中西氏は、河内潟沿岸の刻目突帯文土器期に稻穀が存在したことは認めるものの、それらは瀬戸内地方から運ばれたものとし、水稻耕作自体は行っていなかったと考えた（中西 1992・1995）。遠賀川式土器使用集団と刻目突帯文土器使用集団との明確な差異を捉える氏の歴史観は一貫している。そのほか、高橋龍三郎氏は、遠賀川式土器を持つ人々の流入を想定し、中西氏のモデルに啓発されるとしながらも、刻目突帯文土器期の水稻耕作の開始を評価し、遠賀川式土器使用集団と刻目突帯文土器使用集団とをまったく異質な集団同士の接触と捉えることはもはや困難であるとし、住み分けについても否定的に捉える（高橋 1994）。
- 7) このような集団単位の対応とは異なる想定についても考えうるものについて触れておきたい。例えば、秋山氏のように至近距離での共存を想定するならば、遠賀川式土器使用集団を構成する元々刻目突帯文土器を使用していた集団の由来としては、まずもって最も近接する集団を候補に挙げるべきかと思われる。そうであれば、刻目突帯文土器使用集団内部で分裂が起こったと想定しなければならない。その場合、最も考えやすいのは、婚姻等を契機とした若年層の転出であり、高年層は留まり刻目突帯文土器を使用しつづけることが想定できるが、その場合、刻目突帯文土器使用集団からの転出者の数は少數に留まらなければ併存関係は存続せず、またこの関係が長期間に及ぶためには、当該刻目突帯文土器使用集団は、遠賀川式土器使用集団ではなく、ほかの刻目突帯文土器使用集団からのみ、婚姻による転入を受け入れたと考えなければならず、極めて想定しにくい。

参考文献

- 秋山浩三 1999 「近畿における弥生化の具体相」『論争 吉備』考古学研究会 189-222 頁
- 秋山浩三 2002a 「弥生開始期以降における石棒類の意味」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』上巻 古代吉備研究会 197-224 頁
- 秋山浩三 2002b 「弥生の石棒」『日本考古学』第 14 号 日本考古学会 127-136 頁
- 秋山浩三 2002c 「弥生開始期における土偶の意味－近畿縄文「終末期」土偶を中心素材として－」『大阪文化財論集Ⅱ』財団法人大阪府文化財センター 49-68 頁
- 石毛直道 1971 『住居空間の人類学』鹿島研究所出版会
- 泉拓良 1990 「弥生時代はいつ始まったか」『争点日本の歴史第 1 卷原始編』新人物往来社 188-202 頁
- 上峯篤史 2012 『縄文・弥生時代石器研究の技術論的転回』雄山閣
- 大阪府教育委員会 1998 『田井中遺跡発掘調査概要Ⅶ』(財) 大阪府文化財調査研究センター 1996 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告－第 5 次－』(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 15 集
- 岡田憲一 2008 「編年研究の現状と課題④近畿・四国・中国地方」『縄文時代の考古学 2 歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系』雄山閣、189-197 頁
- 岡田憲一 2014 「瀬戸内海東辺における凸帯文土器と遠賀川式土器」『中四国地域における縄文時代晚期後葉の歴史像』第 25 回中四国縄文研究会徳島大会事務局 149-164 頁
- 金関 恕+大阪府立弥生文化博物館編 1995 『弥生文化の成立 大変革の主体は「縄紋人」だった』角川書店
- 鎌木義昌 1965 「縄文文化の概観」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房新社 1-28 頁
- 神戸市教育委員会 2003 『新方遺跡 野手西方地区発掘調査報告書 1』
- 小南一裕 2012 「環瀬戸内における縄文・弥生移行期の土器研究」『山口大学考古学論集』中村友博先生退任記念事業会 45-76 頁
- 小林行雄 1932 「吉田土器及び遠賀川式土器とその伝播」『考古学』第 3 卷第 5 号 東京考古学会 21-27 頁
- 小林行雄 1938 「弥生式文化」『新修日本文化史体系 原始文化』誠文堂新光社 214-252 頁
- 小林行雄 1951 『日本考古学概説』創元新社
- 小林行雄・藤岡謙二郎・中村春壽 1938 「近江坂田郡春照村杉沢遺跡－縄文式土器合口甕棺発掘報告－」

- 『考古学』第9巻第5号 東京考古学会 221-237頁
佐原 真 1970「大和川と淀川」『古代の日本5 近畿』
角川書店 24-43頁
- 妹尾裕介 2014「瀬戸内海東部における凸帯文土器の
変遷と展開」『考古学研究』第61巻第1号 考古学
研究会 32-51頁
- 高橋龍三郎 1994「近畿地方における弥生文化形成の
問題－縄文文化から弥生文化への変容をどうとらえる
か－」『淀川文化考』(2) 近畿大学文芸学部文化学
科 137-186頁
- 高松龍暉・矢野健一 1997「縄文集落の定住性と定着性－
兵庫県養父郡八木川上・中流域における事例研究－」
『考古学研究』第44巻第3号 考古学研究会
82-101頁
- 田中清美 2000「河内潟周辺における弥生文化の着床
過程」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
869-900頁
- 田端直彦 1997「畿内I様式古・中段階の再検討」『立
命館大学考古学論集I』79-99頁
- 千葉 豊 2008「型式学的方法①」『縄文時代の考古学
2 歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系』同
成社 43-54頁
- 坪井清足 1970「畿内のあけぼの」『古代の日本5 近畿』
角川書店 7-23頁
- 中井一夫 1975「前期弥生文化の伝播について」『檍原
考古学研究所論集 創立三十五周年記念』吉川弘文
館 75-98頁
- 中西靖人 1984「前期弥生ムラの二つのタイプ」『縄文
から弥生へ』帝塚山考古学研究所 120-126頁
- 中西靖人 1992「農耕文化の定着」『新版古代の日本
第5巻 近畿I』角川書店 93-118頁
- 中西靖人 1995「大阪湾沿岸－中部瀬戸内で変容した
文化の伝播」『弥生文化の成立』角川選書 152-159
頁
- 中村 豊 1998「稻作のはじまり－吉野川下流域を中心
に－」『川と人間－吉野川流域史－』淡水社 79-
100頁
- 中村 豊 2022「終末期の土器・呪術具及び集落の変
遷からみた縄文／弥生移行期の研究展望」『縄文時
代』第33号 縄文時代文化研究会 83-102頁
- 浜田晋介 2018『弥生文化読本』六一書房
- 林 謙作 1986「亀ヶ岡と遠賀川」『岩波講座日本考古
学5 文化と地域性』岩波書店 93-124頁
- 春成秀爾 2007「近畿における弥生時代の開始年代」『新
弥生時代のはじまり第2巻 縄文時代から弥生時代
へ』雄山閣 20-34頁
- 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会
1998『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告－阪神高速道
路東大阪線水走ランプ建設に伴う調査－』
- 藤尾慎一郎 2009「弥生開始期の集団関係 古河内潟
沿岸の場合」『国立歴史民族博物館研究報告』第152
集 国立歴史民俗博物館 373-400頁
- 豆谷和之 1995「前期弥生土器出現」『古代』第99号
早稲田大学考古学会 48-73頁
- 豆谷和之 2008「水走遺跡第8次調査におけるCピッ
ト貝塚(第28-2層)の土器群－その一括性を検討
する－」『泉拓良先生還暦記念論文集 文化財科学
としての考古学』泉拓良先生還暦記念事業会 191-
204頁
- 三好孝一 1996「河内潟における遠賀川系土器の始原
－若江北遺跡第5次調査の成果から－」『巨摩・若
江北遺跡発掘調査報告－第5次－』財団法人大阪府
文化財調査研究センター
- 森岡秀人 1993「初期稻作志向モデル論序説－縄文晩
期人の近畿的対応－」『関西大学考古学研究室開設
四拾周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室
25-53頁
- 森岡秀人 1995「初期水田の拡大と社会の変化」『弥生
文化の成立』角川選書 24-38頁
- 矢野健一 2008「縄文時代の編年」『縄文時代の考古学
2 歴史のものさし』同成社 1-21頁
- 矢野健一 2016『土器編年による西日本の縄文社会』同
成社
- 山内清男 1932「日本遠古の文化－縄文土器文化の真
相－」『ドルメン』第1巻第4号 岡書院 40-43頁
- 山内清男 1952「第二トレンチ」『吉胡貝塚』(埋蔵文化
財発掘調査報告第一) 文化財保護委員会 93-124頁
- 山内清男 1964「日本先史時代概説」『日本原始美術I』
講談社 135-147頁
- 若林邦彦 2000a「河内潟沿岸地域における弥生文化成
立期の様相」『第47回埋蔵文化財研究集会 弥生文
化の成立－各地域における弥生文化成立期の具体
像－』埋蔵文化財研究集会 247-266頁
- 若林邦彦 2000b「弥生集団」・「縄文集団」の並存説に
寄せて－田中清美論文へのコメント－『突帯文と遠
賀川』土器持寄会論文集刊行会 900-901頁
- 若林邦彦 2002「河内湖周辺における初期弥生集落の
変遷モデル」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼
論文集－』上巻 古代吉備研究会 225-239頁
- 若林邦彦 2021『弥生地域社会構造論』同成社